或問 WAKUMON 47
No.10,（2005）pp.47-63

初期中国語文法用語の成立
——モリソンの『英吉利文話之凡例』とその後の教科書

朱 鳳

はじめに

中国では中国の文字学に関する研究を古代から字形学、音韻学、訓詁学の三つに分け、それぞれ形、音、義を研究する学問としてきた。その中に文法に関する研究は含まれていない。それは、古代の中国人が品詞の分類や、文中で果たされる役割より、文字そのものに研究の重きを置いていたからである。古代中国語では、文字を「実詞」、「虚詞」と大きく二分類しているのみである。そのため、西洋の文法概念が中国に導入されるまで、中国語には文法に関する語彙が非常に乏しかった。

17世紀に中国にやってきたヨーロッパの宣教師が宣教活動の中で、中国語を習得する重要性を感じ、中国語学習教科書、中国語文法書などを数多く出版した。彼らは中国語の文法理論が乏しいことに気づき、ほとんどラテン語の文法にもとづいて中国語の教科書、文法書を書いた。しかし、当時の印刷事情などの制限により、ヨーロッパ言語で書かれたこれらの教科書、文法書にほとんど中国語原文が掲載されていない。そして読者層を限定されたヨーロッパ人と想定していたため、文法の解説もヨーロッパ言語でこと足り、文法の専門用語に中国語の対訳を作る必要がまったくなかったのである。

中国人読者のために、西洋の文法をはじめて体系的に中国語に導入したのは、19世紀に中国をおとずれた宣教師のロバート・モリソン（Robert Morrison, 1782-1834）と考えられる。1823年、モリソンが中国人学童のために書き下ろした『英吉利文話之凡例』という英文法の教科書は、その最初の試みと位置づけられる。

モリソンは中国へのプロテスタント宣教の先駆者として知られているが、同時に言語教育者としても東西文化交流に大きな功績を残した人物である。

彼は1807年に中国に上陸した直後に、中国語辞書の編纂に着手し、これから中国に来るヨーロッパの宣教師、商人あるいはヨーロッパ在住の中国に関心を持つ人々に中国語学習のツール

を提供した。また、同僚のミルン(William Milne 1785-1822)とともにマラッカで英華書院（Anglo-Chinese College）を作り、中国人及び現地の人々に英語と西洋文化を紹介することにつとめた。

モリソンは学校の設立に尽力したにとどまらず、みずから、教壇に立ち、学生に英語や、中国語を教えたりもした。また、英華書院のために以下のような教科書も作り上げた。

1. Joyce's Scientific Dialoguesの翻訳本[1] （1823年、筆者未見）
2. A grammar of the English Language 英吉利文話之凡例 （1823）
3. China: A Dialogue for the use of schools （1824）

これらの教科書は低学年用であるため、簡略で分かり易い言葉で書かれている。例えば、『英吉利文話之凡例』を以前モリソンが著した中国語文法書『通用漢言之法』と比べると、使用している言葉とあげられている例文はかなり簡潔かつ平易なものとなっているのがわかる。しかし、『英吉利文話之凡例』は初めて中国語で書かれた英語教科書であるため、多くの英文法用語はモリソンが苦心して翻訳せざるを得なかった。本論文では、この教科書にみえる英文法用語の中国語訳を中心に、英文法の専門用語がどのように中国語に翻訳されていたか、そしてそれらの訳語がモリソン以降の宣教師および中国人の書物にどのように受け継がれ、発展されていったのかについて検討していきたい。

一 『英吉利文話之凡例』の出版背景とその概要

大英図書館に所蔵されている『英吉利文話之凡例』の表紙に「Robert Morrison, A Grammar of the English Language, for the use of the Anglo-Chinese College, Macao, 1823」と記されている。これによれば、この教科書は英華書院の学生の英語学習のために書き下ろされたものである。

Brian Harrisonの調査によると、1823年英華書院の在校生は15名、1824年は26名。確かに増えてはいるが、その数はまだまだ少ない[2]。利用者の生徒数から見ると、『英吉利文話之凡例』は限られた人にしか読まれていない教科書であり、その影響はモリソンの他の書物と比べると、限定されたものであるとはいえ、はじめて中国語で英文法を説明する試みとしての意義が大きい。

1823年はモリソンにとって非常に多忙な一年であった。1月はシンガポールに滞在し、当時のシンガポール総督Rafflesとシンガポール学院の設立について討議していた。2月から7月の五ヶ月間はマラッカの英華書院に滞在し、学校の事務処理と教学に追われていた。8月から11月はまたマカオに戻り、そして12月は休暇のためイギリスへ向かった。『英吉利文話之凡例』はこのスケジュールの合間を縫って執筆されたものであり、英華書院で実際に教壇に立つ経験も踏まえられていると考えられる。

『英吉利文話之凡例』は原文の英語に中国語が附されている形で書かれたものである。しかしその英中対照文は完全なものではなく、中国語に翻訳しきれない部分が目立っている。英語テキストの内に英文法の概念を表す専門用語が多く含まれているため、モリソンは中国語に本来ないこれらの概念を中国語に翻訳するのに苦心していた。彼が中国語の単語あるいは短文を駆使して、英語の文法概念を中国人学生が理解しやすいように解説する様子が教科書の訳文からにじみでている。どうしても適切な中国語が見つからない場合は、英単語をそのまま中国語訳文に混ぜる形をとっている。

『英吉利文話之凡例』は97ページからなる教科書である。その内容は下記のように要約することが出来る。

一、ORTHOGRAPHY, OR CONCERNING LETTERS,　字頭論

①相連一個CONSONANT 同一個VOWEL為得其正音之法表

A TABLE SHEWING HOW TO CONNECT A CONSONANT WOTH A VOWEL,

IN ORDER TO OBTAIN THE CORRECT SOUND

②二個字頭相連成語之表

EXAMPLES OF TWO LETTERS FORMING A WORD

③三個字頭相連成語

THREE LETTERS JOINED, FORMING WORDS

④両三個字頭成句之語

INTELLIGIBLE EXPRESSIONS CONSISTING OF WORDS OF TWO OR THREE LETTERS

⑤四個字頭相連成口気一發之意

WORDS OF FOUR LETTERS AND ONE SYLLABLE

⑥常用雑字

MISCELLANEOUS WORDS IN CONSTANT USE

⑦成句之語

SENTENCES

⑧字載之有一個両個多之SYLLABLE不等

WORDS OF ONE TOW OR MORE SYLLABLES

⑨SENTENCES

二、ETYMOLOGY　字従来論

①OF NOUNS　論人物名目

②OF GENDER　論名目之公母

③ OF CASE 論

④DECLENSION OF PRONOUNS

⑤論 NUMBERS, GENDER, AND CASE成語課

⑥論ADJECTIVES

⑦論生字即VERBS

⑧論其ADVERBS

⑨OF THE CONJUNCTIONS

⑩OF PREPOSITIONS

⑪OF INTERJECTIONS

三、OF SYNTAX

①OF PRONUNCIATION

四、PROSODY 論字詩之正音

(タイトルの頭に附した数字は筆者による)

以上から見ると、モリソンは英文法を四つの概念に分けて紹介しているのである。それはOrthography、 Etymology、 SyntaxとProsodyである。1816年に出版された『通用漢言之法』で、モリソンはすでにこれらの概念に触れていた。ただし、その時モリソンは英文法を説明するのではなく、英文法にもとづいて、中国語の文法を解説しようとしていたのである。同書はヨーロッパ人向けに書かれたものであるため、例文に中国語があげられているが、説明文はすべて英語であった。したがって、英文法用語に中国語訳が見あたらない。おそらくその時点では、英文法の専門用語を中国語に翻訳しようという意識も必要性もモリソンは感じていなかったのではないかと思われる。しかし、7年後に書かれた『英吉利文話之凡例』は、中国人の学生を相手に英文法を教える教科書であるため、当然モリソンは英文法の概念を中国語で説明し、中国人に理解させる必要に迫られた。

次章では、『英吉利文話之凡例』でモリソンが英文法の専門用語をどのように中国語に翻訳しているのかを取り上げたい。そして第三章ではその訳語を後の宣教師らの教科書、および中国人によって書かれた文法書『馬氏文通』における訳語と比較してみたい。

二 『英吉利文話之凡例』にみえる英文法概念の翻訳

Ⅰ Grammarの定義と訳語

モリソンは『英吉利文話之凡例』の最初の一節に、Grammarに下記のような定義を与えた。

Grammar is the art of using words properly.

Grammar is divided into four parts, calls Orthography, Etymology, Syntax, and Prosody.

文話之凡例是字語正用之法。

文話之凡例分四條謂之Orthography, Etymology, Syntax, and Prosody,即是字頭論、字従来論、字成句論、字音韻論[3]。

ここで、モリソンは「grammar」に定義を与えると同時に、Orthography, Etymology, Syntax, Prosodyにも中国語訳を与えた。

まず「grammar」の訳語について考えたい。モリソンは「grammar」を「文話之凡例」と訳している。この単語と中国語との関わりは17世紀に遡ることが出来る。前述したように、当時中国在住のカトリック教宣教師が中国語の必要性を感じ、ラテン語の文法にもとづいて、中国語文法書を著した。これらの書物の中に「grammatica」という言葉がよく見える。ただし中国語には翻訳されていなかった。「grammar」に最初に中国語訳を与えたのは恐らくマーシュマン（Joshua Marshman 1768ー1837）とモリソンであろう。両氏の訳語が見える文法書を年代順に並べると、下記の如くである。

表1

	書名	著者	出版年	中国語訳語
Grammar	中国言法　Elements of Chinese Grammar	マーシュマン	1814	言法
	通用漢言之法 A Grammar of Chinese Language	モリソン	1816	通用･･･之法
	英吉利文話之凡例 A Grammar of the English Language	モリソン	1823	文話之凡例　文字言語之凡例

ところで、上記に示されている訳語「言法」と「通用・・・之法」はいずれも書名の中国語訳として飾られているのみで、本文にはまったく見あたらない。まだ著者に英語の「grammar」を中国語で中国人に紹介するという意識があるとは言いがたい。これに対して、「文話之凡例、文字言語之凡例」には、英文法の概念を中国人向けに中国語で解説しようとするモリソンの意

識がはっきり見て取れる。同じ中国語訳でありながら、『英吉利文話之凡例』を執筆していたときのモリソンの方がより積極的である。

しかし、上記の三つの訳語はいずれも中国語として定着しなかった。19世紀初頭の中国に西洋の言語文化を受け入れる環境がまだ整っていなかったのはその原因のひとつとして考えられる。「grammar」という言葉が中国で定着するためには、まず中国人が西洋の文法理論をある程度理解しなければならない。その環境を整えるきっかけを作ったのは、1898年に出版された『馬氏文通』である。ヨーロッパ留学帰りの馬建忠は中国人として初めてラテン語の文法理論を用いて、体系的な中国語文法書を著した。この著作の中に「grammar」に言及した部分がある。「葛郎瑪者、音原希臘、訓曰字式、猶云學文之程式也（グラマーとはもともとギリシャ語であり、字式と訳し、作文の規則のことである）[4]」。ここで「grammar」は「字式」と訳されている。この訳も最終的に社会一般に受け入れられるにいたらず、残らなかったが、『馬氏文通』によって西洋の文法が中国人にとってより身近なものになったのである。

前述のように、モリソンは「grammar」に定義を与えたほか、Orthography、Etymology、Syntax と Prosodyも紹介し、かつそれぞれに字頭論、字従来論、字成句論、字音韻論と訳語を与えた。しかし、この四つの訳語は必ずしもモリソンのなかで固まっていたわけではないようだ。なぜならば、それらが全書を通して、統一して使われていないからである。モリソンは全書を上記の四つの言葉に従い、四章に分けて著したが、最初の二章こそ「字頭論」と「字従来論」をそのまま用いているが、第三章には、先ほど見たように（3ページ参照）章の題名には、英語の「Of Syntax」の横に訳語の「字成句論」が見あたらない。そして、第四章にいたっては、章の題名「Prosody」の訳語が「字音韻論」ではなく、「論字詩之正音」と新たに訳し直されており（3ページ参照）、モリソンがまだ訳語をつかみ切れていないことをうかがわせる。

Ⅱアルファベット及び発音に関する訳語

アルファベット文字を使用しているヨーロッパ言語にとって、Orthography、つまり正書法はとりわけ重要なのである。一方アルファベットをもたず、象形文字の漢字を書写記号とする中国人にとってそれはもっとも理解しがたい部分である。モリソンは英語と中国語の相違について、かつてこのようにも論述したことがある。「中国語にはアルファベットがない。漢字には目でその発音を確かめられるような要素はなにも含まれていない。発音を無視し、意味の伝達をはかっている。・・・中国語は単音節で構成されていると考えるのが適切である」[5]。従って、モリソンは実に教科書の半分以上の紙面を使ってその正書法を紹介し、中国人学生に表音文字の英語のアルファベット綴りの規則とその綴りから発音を得る方法を丁寧に説明している。当然

アルファベットや、発音に関する専門用語も中国語に訳されている。その訳語は下記の表にまとめることができる。

表2

英語	『英吉利文話之凡例』の訳語	現代中国語訳語
letter	1 字頭 2 音母碎字	字母
vowels	ae i o u y六字頭	元音
consonants	其餘二十字頭	輔音
diphthong	両個vowels字相連	双元音
triphthong	三個vowels字相連	三元音
syllable	1 口気一発成音 2 口気一発之意	音節
sentence	成句之語	句子
accent	四聲之屬	声調
alphabet	音母碎字	字母

「letter」、「alphabet」の訳語は、モリソンの造語である。また、中国語の文字がほとんど単音節であるのに対して、英語の単語は多音節が多い。それを説明するために、モリソンは単音節で構成されている２文字の単語（am、go、weなど）、3文字の単語（act、cow、dayなど）、4文字の単語（alms、bone、doorなど）、多音節の単語（every、England、Chinaなど）と細かく分けて単語リストを作り、その上、単音節の単語のみで構成されている短文と多音節の単語のみで構成されている短文リストも附した。このような綴りと音節の難易度の順序を追う方法を取り入れて、モリソンは中国人に英語の音節構造を丁寧に解説している。

Ⅲ品詞に関する訳語

すでに述べたように、古代中国語では、文字を「実字」と「虚字」に二分類するのみで、語の分類に関する文法用語は限られたものしかない。モリソンはこの教科書の中で、英語の語源学に関する文法概念をつぶさにあげ、出来るかぎり中国語に訳そうとしている。

まずEtymologyを「字従来論」と訳し、さらに「各字彼此相从、會意、更改、分類等學（各字の語源、組み合わせ、変化、分類などの学問）」と定義した。次にモリソンは英語の品詞を分類すると十種類[6]あると述べ、その品詞の名前と特徴を紹介した。その十品詞の訳語を下記の表に

記す。

表3

英語	『英吉利文話之凡例』の訳語	現代中国語訳
Noun	1 死字 2 凡有人、物、所在、事之名目	名詞
article	A, an, the	冠詞
pronoun	代一個noun而用之字	代詞
adjective	言其noun之好、臭、大、小等意	形容詞
verb	1 生字　活字 2 言人物或在、或是、或作、或被外物使	動詞
participle	是从那verb来的而略帯adjective之意。	分詞
adverb	其verb有一類字添在其旁為注其verb如何	副詞
preposition	助語字、附着noun與pronoun、為連着句用	介詞
conjunction	連着句用	連詞
interjection	忽然嘆美言奇等字	感嘆詞

上にあげた品詞分類に関わる文法概念以外にも、表4にみるように、名詞、代名詞の数、性、格の変化、動詞の時制、態の変化に関する用語も多く訳されている。

表4

英語	『英吉利文話之凡例』の訳語	現代中国語訳
number	論別noun之単之多	数
single	noun之単	単数
plural	noun之多	複数
gender	論名目之公母	性
case		格
nominative case	在verb之先	主格
possessive case	同noun相連	所有格
objective case	在verb之後	目的格
present tense	今日的時	現在式
future tense	将来的時	将来式

past tense	過去的時候	過去式
active voice	做及他人説	主動態

アルファベットを説明すると同様に、英語の品詞分類、名詞、代名詞の数、性、格及び動詞、形容詞の時制、態の変化についての説明にも、モリソンは数多くの例文をあげ、中国語に訳せない部分を補った。たとえば、「active voice」という動詞の態を表す文法概念に、モリソンは「做及他人説」と訳を当てたが、「passive　voice」には適切な訳語が見つからなかった。そこで「to aid」という動詞を例にして、「the passive voice of to aid」の文を表題にして、「被人助説」と訳し、また、各時制における「to aid」の受動態の表現方法をも附し、英語の受動態を説明した。

Ⅳその他の文法概念

正書法（orthography）と語源学（etymology）の他、モリソンは統語論（syntax）と韻律学（prosody）についてもそれぞれ章を立て、解説したが、正書法と語源学の章に比べると、統語論と韻律学に関する説明は簡略であり、全書で4ページの分量しか与えられていない。その理由について、モリソンはこのように書いている。「另有許多例、惟此書不過為小引倘學者、又要進學則可細索其英語之凡例」[7]。つまり、初心者にとってはこれで十分で、統語論と韻律学のほうは上級者向きであるという。

前にも述べたように、モリソンは教科書の冒頭に「syntax」に訳語「字成句論」を与えながら、syntaxの章になると、その訳語を使わずに、「詳言一句之各字如何放得着、用得正之例（文章のなかに各単語がいかに正しく置かれるかについて詳しく論ずるものである）と定義を与えるのみである。また、prosodyの章になると、より簡潔になり、定義も与えず、例文も二、三例しかあげていない。この二章にみえる文法用語の翻訳は表５にみるように、わずかしかない。

表5

英語	『英吉利文話之凡例』の訳語	現代中国語訳
simple sentence	単句	単句
compound sentence	雑句	複合句
accent	聲重讀一字	重読
quantity	聲長的短的讀	音量

ここまで、『英吉利文話之凡例』全体にみえる英文法概念の中国語訳をまとめてみたが、正書法と語源学の章に訳語が偏っていながら、モリソンが翻訳に挑んだ英文法の専門用語がいかに

多いかがわかる。

V『英吉利文話之凡例』にみえる訳語の限界

モリソンが中国に滞在していた19世紀初頭は、中国人と外国人の交流は禁止されていた時期である。外国人は商業あるいは宣教のために、懸命に中国語を学ぼうとしていたが、中国人には夷狄の言語である英語を学習しようという人はほとんどいなかった。このような状況の中で、モリソンは中国本土で本格的な西欧式の教育ができる日が来るまで、中国本土以外で英文法の教科書を作り、英語教育を行い、時機を待っていた。こうしたなかで執筆された『英吉利文話之凡例』は中国語で書かれた最初の英文法書であり、その先駆者としての意義は高く評価されるべきである。いっぽう、先駆者であるゆえに、同書にみえる英文法概念の中国語訳はまだ完成度が低く、一連の専門用語の翻訳はまだ未熟である。ここまで見てきたモリソンが訳した文法用語をまとめた表からも、その初期訳語としての限界を見て取ることができるが、具体的には以下の２点を指摘することができる。

1) 訳語より、解釈文が多い。たとえば、genderを「論名目之公母」としているなどはそれである。

2) 適切な中国語がまだ見つからない場合も多く、その場合は、訳せない英語を中国語に混ぜて（「大great, 更大greater, 極大greatest, 是比較之言英語謂之Comparison, 有三等, 其一謂之Positive, 其二謂之Comparative, 其三謂之Superlative」などのように）[8]、傍らに多くの例文をつけることによって解説する形をとっている。

この限界は時代の限界でもあれば、モリソン自身の限界でもあり、当時の中国語の言語環境が西洋文法の概念を受容するのにまだ不十分であることとモリソンの孤軍奮闘ぶりをうかがわせる。

しかし、不十分ながら、初めて体系的に英文法概念を中国語に導入しようとするモリソンの試みは重要である。この試みは後の宣教師や中国の学者に受け継がれていく。特に品詞の分類法はモリソン以降の中国語文法書によく用いられ、その中国語訳も続出した。第三章ではそれらの品詞名の訳語を取り上げて、モリソンのそれと比較してみることにする。

三　『英吉利文話之凡例』以降の品詞名に関する訳語

I 外国人による教科書から

1823年の『英吉利文話之凡例』以降、英語学習書がいくつも出版された。内田慶市によると、アヘン戦争以降の開国以来、中国で出版された主な英語学習書は下記のようである[9]。

1) Robert Thom 『華英通用雑話Chinese and English Vocabulary』 1843年

2)　『華英通語』　1855年

3)　『華英通話集全』　1879年

4)　張寶楚、馮對山、尹紫芳、鄭久也、姜叙五　『英話注解』　1860年

5)　唐廷樞　『英語集全』　1862年

6)　曹驤　『英字入門』　1874年

7)　楊勲　『英字指南』　1879年

しかし、モリソンの『英吉利文話之凡例』と同じく英語学習書でありながら、これらの英語学習書はすべて、英語単語集、あるいは英語の発音に関する書物である。英文法を取り上げたものは見あたらない。文法用語の訳語をこれらの書物に見つけることはむろんできない。

一方、外国人向けの中国語教科書では、文法用語の翻訳がむしろ多く見られる。アヘン戦争以後、外国人は広州以外の中国都市にも住めるようになるにつれ、外国人の中国語学習の必要性が日ごとに高まってきた。宣教師による中国語あるいは英語で書かれた中国語教科書もこのような需要に応じて次第に多く出版されるようになった。そして印刷事情の改善と読書層の拡大などによって、17世紀にヨーロッパ言語で書かれた中国語文法書や教科書と違い、この時期の教科書には中国語英語対照テキスト、あるいは直接中国語で書かれたものが多く見られる。そのため英文法用語の翻訳も必要に迫られ、あちこちに散見する。次は、その中から2冊をとりあげ、とくに品詞分類に関する訳語を拾い上げて、モリソンのそれと比較してみたい。

①トマス・ウェード（Thomas Francie Wade 1818〜1895）『語言自邇集』1867年

（筆者が参考にしたのは1886年に出版された第2版である）

『語言自邇集』は外国人のために編集された中国語教科書であり、3部からなる大作である。第1部は中国語テキスト、第2部はテキストの英語訳、第3部は漢字の書写法である。その第1部に「言語例畧（parts of speech）」というセクションが設けられている。「parts of speech」をウェードが「言語例畧」と訳したが、現在一般的には「品詞」と訳している。ウェードはこのセクションを十三段（十三課）に分け、さらに中国語の日常会話の例文を126項目に細分し、英語と中国語の言語比較を展開しながら、英語の品詞分類法をもって、中国語の単語の分類を試みている。

彼は、古来より中国語の単語は虚字と実字にしか分けられていない（「統分虚実両大宗」）のに対して、英語の単語は九つの品詞に分類されてきた（「單字共分九類」）という両者の相違に言及している。また、中国語の文章は字句の長短を重視する（「専管那個字句的長短」）のに対して、英語の文章は主語と述語に重点を置く（「無論何句、必須綱目両分、方能成句」）と解説している[10]。

この比較と分類の過程で、ウェードが訳した品詞名がいくつかある。第一部の中国語テキストを第二部の英語テキストと照らし合わせて、『語言自邇集』に現れている品詞に関する訳語を示すと下記の表6になる。

表6

	英語	『語言自邇集』の訳語
第二段	noun	名目
	definite article	指定的字眼児
第三段	attendant noun (numeral)	陪襯的字
第七段	adjective	輔助
第九段	verb	活字

これ以外にも、『語言自邇集』には名詞の数、性、格、動詞の時制、態の変化に関する訳語も見られるが、ここでは取り上げないことにする。上記の表にみえる訳語を、モリソンのそれと比べると、わずか一語においてだが進展が見られる。表3に示したように、モリソンは「adjective」を「言其noun之好、臭、大、小等意」と解説的に訳している。これに対して、ウェードは2文字の「輔助」という単語をあてている。専門用語の翻訳らしくなってきた。

しかし、翻訳されている品詞名はまだ少ない。その理由は二つ考えられる。

ひとつは『語言自邇集』は中国語学習書であり、文法専門書ではないためである。ウェードもはじめから、体系的に英文法の用語を中国語に翻訳しようと目指していないはずである。

もうひとつはモリソンの時と同様に中国語の中に、文法概念を受け入れる言語環境がまだ整っていない。中国語の中に文法概念を表す語が少ない上、文法概念に対する認知度も低いため、訳語の創出はとりわけ外国人にとってはすこぶる困難なことである。この言語の限界についてウェード自身も感じていた。品詞名の翻訳について、彼はこのように述べた。

> 英國無論人物、所有議及是為的、是做的、是受的、這宗字様、都歸為那九項之一。漢文並没有這個限制、較難創出個専名子来[11]。
>
> (英語では人や物にかかわらず、存在、能動、受動に言及されるすべての単語は九つの品詞のどれかに属する。中国語にはこのような制限がないので、専門用語を作り出すのは比較的に困難である。)

しかし同じ困難に直面していても、中国人が執筆や翻訳に加わった場合は、状況はずいぶん

改善される。次に取り上げる例はそれを示す。

②高第丕（P. Crawford）、張儒珍　Mandarin Grammar『文學書官話』1869年

この書物の扉頁に「美國高第丕　中国張儒珍著」と記されている。これは当時の漢訳洋書の出版によくある方法である。つまり、外国人が口述し、中国人が中国語で記録するという方法である。英語の表題Mandarin Grammarから、この書物は中国語の口語についての文法書とわかる。全書は二十一章に分けられ、中国語の発音、字体、単語の分類から、造句法まで詳細に論じ、章ごとに練習問題も附されているので、恐らくこれは学校で使われた教科書と推測できる。中国語で書かれているので、外国人だけでなく中国人も利用していた可能性が十分ある。

さて品詞の分類について同書はこのように述べている。

> 話字分十五類、叫名頭、替名、指名、形容言、數目言、分品言、加重言、靠託言、幫助言、随従言、折服言、接連言、示處言、問語言、語助言[12]。

『語言自邇集』とほぼ同じ時期に出版された教科書だが、中国人張儒珍の参加によって、品詞の分類だけでも訳語がかなり豊富になっている。ここに並べられている十五の品詞名がそれぞれ何を指すのかについて、同書は下記のように説明している[13]。

1）人名、有形あるいは無形のものの名は「名頭」という。
2）替名は名頭の代わり、「我、你、他」などを指す。
3）指名は「這個、那個」などを指す。
4）形容言は「大、小、好」など名頭の様子を表すものを指す。
5）數目言は「一、二、三」あるいは「多少、衆」などを指す。
6）分品言は名頭の分別するために使われる「張、個、本、件」などを指す。
7）加重言は「最、極、甚」などを指す。
8）靠託言は「走、飛、坐、在」などを指す。
9）幫助言は「能、會、該」などを指す。
10）随従言は「先、早、晩」などを指す。
11）折服言は「不、没、未」などを指す。
12）接連言は「與、同、連」などを指す。
13）示處言は「裡、内、中」などを指す。
14）問語言は「麼、甚麼、怎麼」などを指す。
15）語助言は「啊、罷、哎喲」などを指す。

つまり、『文學書官話』は英文法にもとづきながら、中国語の実情に合わせて、より細かい品詞の分類を行っているのである。表7ではこの十五品詞と英語の九品詞との対応を示した。

表7

英語	『文學書官話』の用語
noun	名頭　數目言　分品言
pronoun	替名　指名
adjective	形容言
verb	靠託言　幫助言
adverb	加重言　随従言　折服言　問語言
conjunction	接連言
preposition	示處言
interjection	語助言
article	

本来の英文法では九品詞であるが、この表から分かるように「noun」は通用の名詞（名頭）と数詞（數目言）、助数詞（分品言）に、「pronoun」は代名詞（替名）と指示代名詞（指名）に、「verb」は通常の動詞（靠託言）と能願動詞（幫助言）に、「adverb」は通常の副詞（加重言）と時間副詞（随従言）、否定副詞（折服言）、疑問副詞（問語言）に、それぞれ細分化されている。いっぽう中国語にない冠詞の訳語が見あたらないほか、この教科書は「官話」、つまり白話文で書かれているため、文語の「也、乎、矣、哉」などの助詞についての分類もとり扱われていない。

Ⅱ『馬氏文通』から

西洋の文法理論を用いて、古典中国語（文言文）に対して、本格的な文法分析を行ったのは、1898年に出版された『馬氏文通』である。作者の馬建忠は西洋の文法理論と中国の古典のいずれにも造詣が深いため、『馬氏文通』に使用されている文法用語もそれ以前の宣教師たちの訳語より優れたものが多い。馬氏は『馬氏文通』の最初に「正名巻之一」を立て、「字分九類、足類一切之字。無字無歸之類、亦類外無不歸之字（字は九類に分かれ、これはすべての字を分類するに十分である。この分類に属さない字はない、分類されていない字はない）[14]」と西洋の九品詞の分類法を中国語文法に導入し、まず九品詞に中国語の定義と名称を与えた。

表8

英語	『馬氏文通』の用語
noun	名字
pronoun	代字
verb	動字
adverb	静字
adjective	状字
preposition	介字
conjunction	連字
particle	助字
interjection	嘆字

馬氏は文言文を文法分析の対象としているので、中国語にない冠詞の代わりに「也、乎、矣、哉」に「助字」という品詞名を与えた。その他の八品詞の分類はすべて西洋の文法に従っている。品詞の訳語はかなり整っていて、わかり易くなっている。実際今日日本と中国で使われている品詞名は、「字」と「詞」の違いがある以外は馬氏が作ったものとほぼ一致している。

おわりに

英文法概念及びその用語をいち早く中国語に導入したのはモリソンの『英吉利文話之凡例』である。その後、多くの外国人や中国人の努力によって、文法用語は着実に中国語に浸透していった。本稿はモリソン及び彼以降の宣教師や中国人学者によって訳された文法用語、特に品詞の用語を中心に見てきた。ここで、品詞の用語をもう一度下記の表にまとめ、その訳語の変遷を確認しておきたい。

表9

英語	『英吉利文話之凡例』1823年	『語言自邇集』1867年	『文學書官話』1869年	『馬氏文通』1898年
Noun	4 死字 5 凡有人、物、所在、事之名6目	名目	名頭	名字
article	A, an, the	指定的字眼児		
pronoun	代一個noun而用之字		替名	代字
adjective	言其noun之好、臭、大、	輔助	形容言	静字

	小等意			
verb	4 生字 活字 5 言人物或在、或是、或作、或被外物使	活字	靠託言	動字
participle	是从那verb来的而略帯adjective之意。			
adverb	其verb有一類字添在其旁為注其verb如何		加重言	状字
conjunction	為連着句用		接連言	連字
preposition	附着noun與pronoun、為連語用		接連言	介字
interjection	忽然嘆美言奇等字		語助言	嘆字
particle				助字

これを見ると、1823年の『英吉利文話之凡例』と1867年の『語言自邇集』に見える品詞の訳語はまだ単語としての不安定要素が多いことがわかる。1869年の『文學書官話』と1898年の『馬氏文通』になると、訳者あるいは著者が中国人学者であるため、訳語は安定してきた。特に外国留学を経験し、ラテン語の文法理論を十分理解した馬建忠の訳語は、単なるアメリカ人の口述を中国語に訳した張儒珍よりも精確である上、洗練されている。

西洋文法概念の翻訳において、1820年代当時のさまざまな限界もあり、モリソンの訳語は結果的に訳語として未熟なものに終わってしまったが、いち早く英文法の専門用語を中国語に導入しようとした点において、『英吉利文話之凡例』が先駆的な存在だと評価できる。熱心に言語教育に取り込むモリソンの情熱も後輩の宣教師らに受け継がれ、さらに中国人学者も加わり、中国語、英語の言語交流を盛んに行う中で、今まで中国語に欠如していた文法用語も次第に体系化されるようになった。その進展の足取りは表9からも読み取ることが出来る。

中国語の中に文法用語が新たな語彙として加えられたことは宣教師を媒体とした東西文化交流の一つの大きな成果と言える。その交流は中国語にとどまらず、日本語にも影響を及ぼした。周知の通り、日本語と中国語の文法用語に共通の語彙も多い。品詞名のみで考えるも、「名詞、動詞、副詞、形容詞、前置詞」などをあげることが出来る。このような共通語彙がいかに生まれたかについて、次の研究課題にしたい。

注及引用文献

[1] モリソンは1823年の日記に‘In May I returned again to Malacca, and began a translation of ‘ Joyce's Scientific Dialogues' into Chinese, for the use of the College'と記している。Eliza Morrison *Memoirs of the life and labors of Robert Morrison* (London 1839) Vol.II　p.193

[2] Brian Harrison 'The Anglo-Chinese College at Malacca, 1818-1843' *Southeast Asian History and Historiography* Cornell University Press　p.255

[3] Robert Morrison　『英吉利文話之凡例』　マカオ　1823年　p.3

[4] 馬建忠　『馬氏文通』　商務印書館　2002年　p.15

[5] "The character presents nothing to the eye by which its pronunciation can be ascertained. It attempts to communicate to the meaning, regardless of the sound."
"It is proper to premise that their words consist but of one syllable." Robert Morrison　『通用漢言之法』 Serampore　1815年 p.1,2

[6] 18世紀以降、英語の標準的な品詞は、冠詞、名詞、形容詞、代名詞、動詞、副詞、前置詞、接続詞、間投詞である。モリソンはここで、分詞を形容詞から分離し、独立の品詞の一つとしてあげている。

[7] Robert Morrison　『英吉利文話之凡例』　マカオ　1823年　p.95

[8] Robert Morrison　『英吉利文話之凡例』　マカオ　1823年　p.67

[9] 内田慶市　『近代における東西言語文化接触の研究』　関西大学出版　平成13年　p.271ー292

[10] Thomas Francis Wade　『語言自邇集』in Three Volumes Second Edition Shanghai,　1886 Vol.1 p346-348

[11] Thomas Francis Wade　『語言自邇集』in Three Volumes Second Edition Shanghai,　1886 Vol.1　p327

[12] 美國高第丕　中国張儒珍著　『文學書官話』　同治八年　p.6

[13] 美國高第丕　中国張儒珍著　『文學書官話』　同治八年　p.6ー35

[14] 馬建忠　『馬氏文通』　商務印書館　2002年 p.23

参考文献

1. 何群雄　『中国語文法学事始『馬氏文通』に至るまでの在華宣教師の著書を中心に』　三元社 2000年
2. 馬建忠　『馬氏文通』　商務印書館　2002年
3. 内田慶市　『近代における東西言語文化接触の研究』　関西大学出版　平成13年
4. 内藤正子　「R・モリソンとJ・マーシュマンの中国文法書」『日本中國學會報』第47集 1995年
5. 孫建軍　「西洋人宣教師の造った新漢語と造語の限界　—十九世紀中頃までの漢訳洋書を中心に」　『日本研究　第30集—国際日本文化研究センター紀要』平成17年
6. Robert Morrison　『通用漢言之法』　Serampore 1815年
7. *Indo-Chinese Gleaner*　Malacca 1818 Vol. Ⅰー Ⅲ
8. Brian Harrison *Waiting for China*　Hong Kong University Press 1979
9. Brian Harrison 'The Anglo-Chinese College and Early Modern Education' *Melaka The　Tramsformation of a Malay Capital c1400-1980* Oxford University Press 1983
10. Eliza Morrison *Memoirs of the life and labors of Robert Morrison* (London 1839) Vol.Iー II